研究報告・ノート

ミドルリーダーを中核に据えた教員相互の学び合い

Mutual learning with middle leaders at the core

須佐　宏
SUSA　Hiroshi
（和歌山大学大学院教育学研究科
教職開発専攻）

石神　和弘
ISHIGAMI　Kazuhiro
（和歌山市立四箇郷小学校長）

米田　優介
YONEDA　Yusuke
（和歌山市立四箇郷小学校教諭）

受理日　令和５年 11 月 15 日

抄録： ３代の学校長が思いを引き継ぎながら、10 年の歳月をかけて国語科の研究校として授業改善に取り組んできた四箇郷小学校。同校の校長は、中核教員を若手教員のモデルとして育成し、教員相互が学び合える集団となるよう導いてきた。本稿では、学校長がどんな思いをもって教員集団を導いていったのか、また、中核教員がそれをどう受け止めて実践し、学び合う教員集団による学校改革が進められていったのかを詳述する。

キーワード： 国語科の授業づくり、授業実践力向上、ミドルリーダー、若手教員、チーム

1. はじめに

令和４年９月９日に文部科学省から令和４年度公立学校教員採用選考試験の採用倍率が公表された。それによると、小学校の採用倍率は、2.5 倍で前年度の 2.6 倍を下回り、過去最低であった。和歌山県でも小学校の採用倍率が 2.9 倍となり、３倍を割る状態が続いている。教員採用選考試験に関わらず、「採用倍率が３倍を切ると質の低下を招く」という話をよく耳にする。そのエビデンスは定かでないが、学校現場での初任者教員の様子や各学校から聞こえてくる話からすると、確かにそういう実態があると言わざるを得ない状況である。４月の学級開きから数日もたたないうちに心身の疲労を感じて休職したり、退職したりといった例もある。その原因は様々であるが、小学校の初任者にとって、全ての仕事の中で大きなウエイトを占め、ネックとなっているのが日々の授業である。多岐にわたる事務処理に追われ、肝心の授業準備が十分できぬまま、翌日を迎え、行き当たりばったりの授業をすれば、指導技術の不安が増大し、焦りとなり、児童にそれが伝わり、収拾がつかなくなる…初任者の学級にありがちな光景である。けれども授業は待った無し。日々それが繰り返され、精神的に追い込まれ、教壇を下りてしまう教員もいる。本稿で取り上げる和歌山市の四箇郷小学校も近年、毎年新規採用教員が配置されており、奮闘する若手教員の姿を見てきた。本稿では、そんな同校が、国語科を研究教科として授業研究に取り組む中で、ミドルリーダーを中核に据えて若手教員のモデルとすることによって、学校全体としての授業実践力向上に取り組んできた成果と課題について詳述する。（須佐）

2.　四箇郷小学校の国語科研究

2.1 研究校としてのあゆみ

学校沿革史や研究紀要によると、本校の国語教育研究の歴史については、昭和 62 年（1987 年）、当時の山崎保雄校長が石田佐久馬氏を現職教育に招聘し、指導を仰いだことから本格的に始まっている。翌昭和 63 年は、出口久校長に代わっているが、文学教材に重点を置いて研究を進めるという前年度までの流れを引き継ぎ、平成元年には、同校では初めてとなる研究発表会を開催し、１年・３年・６年生で公開授業を行っている。平成４年に中井澄明校長の代となり、学習指導要領の改訂をふまえて文学作品以外の教材にも研究の幅を広げ、平成６年まで毎年、石田氏の指導を受けながら研究発表会を開催している。平成７年は研究発表会を行っていないが、翌年に赴任した岡本善宏校長のもと、３年間、京都教育大学の位藤紀美子氏を招聘して研究発表会を行っている。

その後、平成 11 年以降も現職教育として校内で国語科の授業研究は続けているが、文学作品、説明文、漢字の指導など、内容にばらつきが見られ、令和２年までの 22 年間、研究の成果を発信する研究発表会は行え

ていなかった。（石神）

2.2 ミドルリーダーを中核に据えた授業改善

前述のように、同校では国語科を研究教科としながらも、その研究成果を発信する機会のないままに日々の実践が行われるようになっていた。そんな同校へ、平成26年、第37代校長として湯川泰成氏が着任した。同校長は、体育科の研究を中心に行ってきた教員であったが、自校の子供たちの学力向上のためには、体育科だけでなく、教室で座って学ぶ教科でも質の高い授業ができる教員の育成が不可欠であるとの認識をもっていた。特に、他教科の学習の根幹ともいえる国語科授業の重要性を感じており、四箇郷小学校が国語科を研究教科としていたことから、国語科学習指導の専門家を校内研修に積極的に招き、教員研修の充実を図ろうとした。筆者が同校に関わらせてもらうようになったのもその時期である。また、同氏の校長２年目には、のちに同校の研究推進の中核を務めることになる米田優介教諭が同校に赴任した。湯川氏は、同校の研究を進めていく上で、同教諭が研究の中核を担える教員になり、学校全体を牽引できるミドルリーダー教員となることを期待して、ベテラン教員を中心に学校として実践研究を後押しする体制を組んでいた。米田教諭もそういった支援に応えながら熱心に授業研究に取り組み、実践経験を重ねて着実に授業実践力を身につけていった。（須佐）

2.3 教職大学院への派遣

平成30年４月、筆者は１年間現場を離れ、現職派遣の大学院生として、和歌山大学教職大学院へ内地留学することになった。筆者が内地留学することを決めたのは、当時、須佐宏氏が和歌山市教育委員会からの出向で、和歌山大学教職大学院へ准教授として赴任しており、「長年、本校の国語科研究に携わっていただいている同氏の傍で学ぶことができれば国語科だけではなく、教師としてのレベルアップにつながる」と考えたからである。

教職大学院では、筆者と同様に現職派遣で来ていた先生方と共に学ぶ中で、現代の学校現場における課題について、自校の課題と比較しながら学ぶことができた。また、まもなく学校現場に出ることになるストレートマスターの大学院生とも関わり、多くの時間を共有する中で、自校の若い先生方が抱える学校現場への不安や物事の捉え方、感じ方について考えることができた。そして、複雑化する学校現場の課題に立ち向かうには、自分ひとりが頑張るのではなく、学校がチームとなって機能しなければならないということを強く感じることとなった。（米田）

2.4 若手育成の視点に立った研究推進

内地留学中は毎週月曜日に自校を訪問し、学校を俯瞰的に観察したり、上田仁校長と自校の課題について話合いを重ねたりした。本校は、採用５年未満の教員が多く、１学年につき２組から３組の中規模校であるため、それら経験年数の浅い者同士で学年団を組まざるをえないことも多い。そのため、研究授業に関わる教材研究はもちろん、日々の授業づくりについても、単学年ではなく、学年を超えて学び合う場が必要なのではないかと考えた。そこで、教材研究の際には、低学年・中学年・高学年の各ブロックに分かれて話合いをもつ機会を設定した。そうすることにより、日常的にベテラン教員によるアドバイスによって若手を育てながら、みんなでひとつの授業を創り出していくという意識が芽生え、授業者のみならず、授業づくりに関わった各教員が当事者意識を持って学び合える集団となっていった。

また、研究授業を行う際には、たびたび須佐准教授に指導助言に来ていただくことができた。自分たちだけで授業や協議をするのではなく、外部評価をいただきながら一貫した指導をしていただけたことで、各教員には、国語科の単元構想の基盤ができ、学校全体として、国語科の研究を進めていく方向性が明確になっていった。（米田）

2.5 コロナ禍における地道な研究

令和２年２月、新型コロナウイルスが猛威を振るい、休校を余儀なくされた。４か月の休校期間を経て６月から学校が再開されたが、分散登校や様々な活動制限を強いられることになった。

数ある制限の中でも、最も授業研究推進の妨げとなったのは、「子供同士の対話の制限」であった。これまで当たり前に行ってきたコの字型座席による対話や、ペア・グループでの対話を極力少なくした「会話をしない授業」が強いられた。さらに、研究授業の規模も縮小された。先述の湯川泰成校長時代より続く「一人一授業実践」も断念を余儀なくされた。

しかし、現校長である石神和弘校長は、教員同士の学び合いの機会をなんとか確保し、子供たちの指導に還元していけないかと策を練り、授業教室と隣の教室をビデオカメラとケーブルでつなぎ、ライブ形式で研究授業と協議を行うことで教員同士が児童の学びの姿から学び合う場を確保することができた。そのような形ではあったが、令和２年は何とか「学年で一授業実践」の研究授業を行うことができた。ただ、やはりそこでの実践は、本校の研究主題である「自分の思いをゆたかに表現する」こと、また、副主題である「目的意識・相手意識を明確にした言語活動」を望むことは難しく、コロナ禍でも出来ることに限った授業実践で、不完全燃焼の研究であったと言わざるを得ない。

令和３年以降もコロナ禍は続き、世の中の風潮や文部科学省から出される通達を確認しながら、「もうこれは大丈夫ではないか」「いまならこれも大丈夫ではないか」などと、手探りの状態ではあったが、教員同士が意見交換しながら、「今できる範囲」を見極め、少しずつ実践の幅を拡張し、地道に研究を進めていった。

（米田）

2.6 23年ぶりの研究発表会

令和３年度、コロナ禍が続いている状況ではあったが、研究推進の機運が高まり、四箇郷小学校としては、23年ぶりとなる研究発表会を和歌山市の教科等別研修会として実施することとなった。（米田）

2.7 授業者の選定

23年ぶりに四箇郷小学校の研究成果を発表するにあたり、授業者を木下信司教諭（令和３年時点で採用５年目）と出津野茜教諭（令和３年時点で採用４年目）の二人に打診した。

当時本校には、豊富な国語科の指導実践経験があり、筆者が国語科の研究を進めていく上で、常に支えていただいていた中村成子教諭と堤真貴教諭という二人のベテラン教員が在籍していた。当時、研究主任であった中村教諭は、木下教諭が新規採用年度の指導担当教員（拠点校指導員）であり、堤教諭はその時の校内指導教員であった。木下教諭はこの両教諭からの薫陶を受けてきた教員であり、これまでの研究成果を発表する授業者として、最も適任であると考えた。

また、両教諭の薫陶を受けてきた木下教諭は物腰も柔らかく、指導力もあり、本校で新規採用となった１～４年目の若手教員にとっては、「憧れ」のような存在でもあった。同教諭が授業者となって、この公開研究授業をすることで、若手教員がその姿を見て、さらに「憧れ」を膨らませるとともに、「次は自分が」という思いが芽生えてくれるのではないか…という期待もあったからである。

一方、出津野教諭は、令和元年に高知県で新規採用され、採用３年目に生まれ故郷の和歌山市に戻ってきた。新規採用からまだ４年目の教諭ではあるが、本校が２校目の学校となる同教諭は、今後長く本校で勤務し、研究を重ねていくことが可能であると考えた。また、何よりもチャレンジ精神が旺盛であり、本校の研究を推進していってくれる存在になることを期待した。二人とも初めは「自分にできるのか」と言った様子であったが、「学校の研究推進のためになるなら」と快諾してくれた。

二人の授業の指導助言者には、木下教諭の方へ須佐宏氏を、出津野教諭の方へ和歌山市客員指導主事である岡山末男氏を招聘した。

本校の新たな研究の一歩を踏み出す研究発表を行う上で、この上ない体制を築くことができたと確信していた。（米田）

2.8 研究発表会の開催

令和３年11月16日。コロナ禍が続く中、参観者の人数制限を設けながらの開催となったが、四箇郷小学校では23年ぶりとなる国語科の研究発表会を開催し、６年１組の『海のいのち』と２年２組の『お手紙』の研究授業を公開することができた。（米田）

3.　若手教員の授業実践力向上

3.1 次年度の授業者への願い

続く令和４年度の研究発表会は、採用３年目の馬場航平教諭と採用２年目の瀬戸優輝教諭に授業提案を依頼した。二人は大学でも同じ専攻に所属していた旧知の仲である。大学では瀬戸教諭が１学年先輩であるが、採用は馬場教諭の方が１年早いという関係の二人は、共に木下教諭の背中を見て育ってきた教員でもある。

筆者は、馬場教諭と令和３年度に、瀬戸教諭とは令和４年度に同じ学年の担任となり、共に学年運営を行ってきたが、若い二人の向上心や謙虚さには日々感服させられてきた。そんな二人には、あえて二人三脚で仲良く進めるのではなく、二人で切磋琢磨し、良い意味で競い合ってほしいと願っていた。（米田）

3.2 若手教員の抜擢と支援体制の確立

若い二人に授業提案を依頼するにあたっては、周りのサポートが必要不可欠となる。この二人を授業者としてみんなで支援することで、前年度以上に学校全体として研究に取り組めるようになることを期待した。

また、この若くエネルギーに満ち溢れた二人は、前年度の出津野教諭同様、この先、間違いなく本校の中心となって学校を引っ張っていく存在になると強く感じていたため、「若くて子供から人気のある先生」から、「若くて子供からの人気があり、素晴らしい授業をする先生」になってほしかった。筆者がこれまで、３代にわたる校長や須佐宏氏、ならびに前出の中村教諭、堤教諭ら本校のベテラン教諭らに与えてもらっていた「実践の場」を、二人の若手教諭にも経験させたい、そうすることが、これまで筆者が学ばせてもらってきたことを還元することになると考え、若い二人を授業者に抜擢することにした。（米田）

3.3 授業づくりを支える支援体制①（馬場教諭編）

令和４年度、馬場教諭は６年生担任、学年主任は松間啓介教諭であった。松間教諭の前任校は、和歌山市立新南小学校であり、同校は、和歌山市の国語科教育を牽引してきた研究校である。同教諭は、同校の研究発表会で何度も授業提案してきた実績をもっている。

学年に松間教諭がいる環境にある馬場教諭にとっては、国語科の授業づくりについて多くのことを学べる絶好の機会であった。

指導助言は前年度に引き続き岡山末男氏に依頼した。さらに、研究協力者として、令和４年度から和歌山市立和佐小学校へ異動となった昨年度の授業者・木下信司教諭にも関わってもらうことにした。加えて、本校の高学年チームによる手厚いサポートを行うという支援体制を組んで授業研究がスタートできるようにした。

馬場教諭は、採用１年目と２年目は４年生担任であった。何でも器用にこなす馬場教諭には一度、大きな壁を乗り越えるという経験をさせたかった。「海のいのち」は、まさにその大きな壁になってくれる教材であった。高学年チームで何度も議論を重ね、後述する三上正芳氏のもとを訪ね、木下教諭に相談し、それを何度も繰り返しながら授業研究を進めるという姿があった。必死に教材研究に勤しむ馬場教諭の真摯な姿が、高学年チームスタッフによる手厚い支援を誘発する原動力ともなり、好循環を生んでいたと言える。

（米田）

3.4 授業づくりを支える支援体制②（瀬戸教諭編）

瀬戸教諭は本校での講師経験を経て、採用２年目であった。講師時代には特別支援学級、採用１年目は５年生担任、そして採用２年目となる令和４年度は筆者と共に２年生の担任であった。瀬戸教諭は、特別支援学級の担任経験で培った子供に目線を合わせることや、個に応じた手厚い支援ができるため、学年に関係なく、子供たちの多くが心を開く教員である。しかし、学級全員が学びを深めていけるような授業をするには、何をどうすればよいのか悩んでいる様子も見受けられた。そんな瀬戸教諭には、今回の授業実践による成功体験により、授業実践力の向上を実現してほしいと思っていた。

瀬戸教諭の研究協力者は、先述の堤真貴教諭に引き受けていただくことができた。当時は和歌山市立貴志南小学校に異動されていたが、国語科の豊富な授業実践経験と知識を注いでいただくことができた。木下教諭同様、何度も本校に足を運び、筆者を含む低学年チームに寄り添い、支援していただいた。本校のメンバーの心の拠りどころともなり、気軽に相談できる存在であったことが大きな支えになっていた。指導助言には、須佐准教授に入っていただき、瀬戸教諭が授業研究を進めていく上で、必要な支援体制を組んでスタートすることができた。（米田）

3.5 ２年連続の研究発表会開催

令和４年11月16日、前年度に続き、コロナ禍で人数制限を設けながらではあったが、２年連続で研究発表会を開催することができた。図らずも、令和３年度と同じ、６年生の「海のいのち」と２年生の「お手紙」を扱う授業を公開するようになり、授業者であった木下、出津野両教諭にも支援してもらいながら進めていけるという心強さがあった。授業者の二人が高め合い、励まし合いながら迎えた研究発表会。本番を迎えるころには、本校の教員たちの間で、「自分たちのやり方」、「四箇郷の国語」といった言葉が聞かれるようになり、自分たちが進めてきた研究内容に対する自信が芽生えてきていることを感じた。

研究を続けるうちに、①子供の問いを大切にする、②子供が魅力を感じる単元構想、③立ち止まり音読させる、の３つが四箇郷の共通理解となって見えてきた。これは、誰からの押し付けでもなく、自分たちで導き出したものとして、共有することができるようになっていった。（米田）

3.6 つながる思い

令和５年度は、本校が研究発表会を再開してから３年目の年となる。過去２年間は、二人の授業者によって、２本の授業提案をおこなってきた。３年目となる令和５年度は、11月15日に３本の授業を提案する予定である。

令和４年度に授業者を決める際、実は、馬場教諭と瀬戸教諭以外にも授業者に手を挙げてくれた教員がいた。川島光教諭である。川島教諭は、日頃から進んで自身の授業を公開する教員である。職員室前方のホワイトボードに、「○月○日○限、モチモチの木の授業見に来てください！」と記し、我々教員に学びの場を提供してくれる。同教諭は、前述のような筆者の思いを汲んでくれ、１年間、授業者を待ってくれていた。研究発表会の授業者に「順番待ち」が生まれたのである。さらに、昨年度の若い二人の授業者の姿を見ていた採用２年目の森岡卓也教諭、新規採用時に和歌山大学教職大学院で行われた初任者研修プログラムで須佐准教授の指導を受けてきた米澤優貴教諭の中にも、「次は自分が」という覚悟が芽生えてきていた。

研究発表３年目は、筆者からの打診なしに希望者が３人もいるという状況が発生していた。研究校ともなれば、「誰かがしなければいけない」という雰囲気にもなりかねないが、本校には、このような前向きな者がいる。令和３年度の授業者の姿に憧れ、令和４年度の授業者が立ち、令和４年度の授業者に刺激を受けて、令和５年の授業者が続こうとしてくれている。このことは、今後も自分たちで「四箇郷の国語」を形成していける素地ができてきたと実感している。（米田）

4. 学び合う教員集団を支えるまなざし

四箇郷小学校における研究実践がこのような成果を

挙げてくることができたのは、中核となって同校の研究を推進してきた米田優介教諭を中心に同校の教職員が相互に学び合う姿勢をもって実践研究に励んできたことが大きいと言える。しかし、そこにはその営みを支え続けた３人の学校長と同校の近隣住民で中堅、若手の求めに応じて、日々相談にのり、アドバイスを送り続けている三上正芳氏の支援があったことを抜きにしては語ることができない。（須佐）

4.1 ３代の学校長による推進力のリレー

前述のとおり、湯川泰成氏が校長在任中に、米田優介教諭を中核に据えた国語科の授業改善への取組がスタートし、平成29年度には上田仁氏が校長に就任し、令和２年には本稿の共同執筆者である石神和弘氏が校長に就任した。学校長が変わることで、研究の方向性が変わったり、研究の推進力が弱まったりすることはよくあることであるが、四箇郷小学校の場合、湯川氏、上田氏、石神氏が学校長としての指導性を十分発揮しながらも、トップダウンでものごとを推し進めるのではなく、湯川氏が目指そうとした「ミドルリーダーを中核に据えた相互に学び合う教員集団による学校改革」を停滞させることなく、推進力のバトンを３代の学校長がうまくつなぐ形で、米田教諭を中核にしたベテラン層、ミドルリーダー層、若年教員層が相互に学び合う様子を見守り続け、後方支援という形で推進力となっていたことは特筆すべき営みであったといえる。（須佐）

4.2 スーパーバイザーによる支援

前述の学校長三氏に加え、同校が研究を進めていくにあたり、大きな推進力となって同校の教員に関わり、中堅、若手の教員のスーパーバイザーとして同校に関わり続けている三上正芳氏のことについても触れておきたい。同氏は、元小学校校長で、学級づくり、子供理解についての具体的な助言のできる人物で、和歌山市の客員指導主事でもある。筆者が同校を訪問した際にもたびたび一緒に授業を参観した。また、授業のことや子供たちのことについて相談するために同氏のもとへ足を運ぶ若手教員の姿を度々目の当たりにしている。同氏の日常的な関わりにより、同校の教員が同氏から子供理解について学びを深めていったことが、同校の教科学習における子供理解につながっていったことは容易に想像することができ、同氏の功績は大であると言える。（須佐）

4.3 学校長としての支援

現在の研究がスタートしてから「３代目」となる石神和弘氏に、後方支援の実際について聞いた。（須佐）

互いに学び合い、高め合おうとする良き職員集団へと変容していくためには、様々な要因が必要である。

一つは中核となる志の高いリーダーの存在で、本校の場合、米田教諭がこれにあたる。さらに、令和２年には、他校で国語教育の研究を深めてきた松間教諭が本校へ赴任したことも大きい。

次に、学術的に専門性が高く、献身的に支えてくれようとする師匠の存在である。前述の三上正芳氏、須佐准教授がこれにあたる。そして何より、共に学び合おうとする仲間の存在である。授業を公開することで自らの未熟さをさらけ出しても、温かく受け止め、的確に改善点を指摘したり、参考になる点を述べ合ったりする中で、安心感、同僚性も高まり、徐々にその人数が増えて行った。

このように自らの実践力を向上させようとする意欲が高まりつつある中、校内だけで行う研究会ではいずれ熱も冷めることが予想されたため、より高い目標が必要だと考えた。そこで、令和３年に和歌山市の教科等別研修会で研究発表会を開催することを提案した。幸い、このことについては研究主任である米田教諭も同じ考えをもっており、先々代の湯川泰成校長時代からの夢であったということも聞いた。

教科等別研修会に授業を出すにあたり、最も重視したのが、若手教員の実践力向上である。研究発表会の授業者が、研究授業を経験することによって自信を深め、次に自分もその場に立ちたいと後に続く者が出てくるような、学び合うことが楽しいと感じるような校内の雰囲気を高めたいと考えた。

長年教科研究を行っている学校では、その教科の研究会員に研究協力を依頼することが多いが、事前協議の際、発言に遠慮があったり、授業者が理想とする学習の方向性と相違が生じたりすることが少なからずある。よって、本校の研究授業づくりにおける研究協力者については、授業者が共に学びたいと願う人物であることを最優先して、協力を依頼することにした。そのため、試行錯誤する時間、一見無駄に映る時間が増えてしまったかもしれない。しかし、若手教員にとってこの時間は大変重要で、自らが目指そうとしている授業像を具体化するためには、また、実践力を向上させるためにはどうしても避けて通れない道であると考えている。

働き方改革が叫ばれている中ではあるが、授業者が、授業研究に多くの時間を費やす必要感があるときにはそれを認めること、また、先進校への視察を積極的に後押しすることが学校長としてしてきた支援であったと今にして思う。（石神）

5.　今後の課題と展望

令和３年２月26日に中央教育審議会答申によって示された「令和の日本型学校教育」では、全ての子供たちの可能性を引き出す個別最適な学びと協働的な学

びの実現が求められている。また、一方で、教員の働き方改革の必要性についても多くの議論がなされている。四箇郷小学校の教員集団が取り組んでいる国語科の授業づくりは、本稿「3.5 ２年連続の研究発表会開催」の中で米田氏が述べているように、①子供の問いを大切にする（＝子供たちの気づき、発想、可能性に寄り添う）、②子供が魅力を感じる単元構想（＝どの子も意欲的に学びへと向かえる学習）、③立ち止まり音読させる（＝言葉を介して互いに思考を巡らせる機会を持つ）を共通認識して進められており、まさに前者を実現するための授業づくりであると言える。

一方で、よりよい授業にするために、労を惜しまない同校の教員の姿は、ともすれば働き方改革から逆行しているように見えるかもしれない。しかし、現学校長である石神氏の自校の職員を見守るまなざしからは、「若手教員がやるべきとき、力をつけなくてはならないときには、グッとアクセルを踏み込んで精一杯取り組めるようにして、ワークライフバランスを取りながら走り切れるようにして育てる」という覚悟と優しさが感じられる。

同校の研究は、トップダウンではなく、ボトムアップによって10年の歳月をかけて築き上げてきた各世代の教員が密に関わりながらチームとして創り上げていく授業研究スタイルである。

しかし、この先、同校にも人事異動による人の循環は必ずおこる。同校の研究がさらに継続し、充実していくためには、授業者同様に「次は自分」という自覚を持った新たなミドルリーダーと新たなベテランサポーターの存在が不可欠である。幸い、同校には次を託せる人材も控えていると筆者は見ている。（須佐）

6. おわりに

筆者が同校の授業研究に関わらせていただくようになってから、今年でちょうど10年になる。当時から同校の教員集団は、熱心に授業研究の話に耳を傾け、授業改善に取り組もうという姿勢があったため、すぐにでも研究発表会が再開できるではないかと進言したことがあった。しかし、湯川校長は、「まだ駄目なんや。」と急き立てる筆者をたしなめるように話していたことを記憶している。今振り返ってみると、湯川氏のその言葉は、「そこを目標としながらも、慌てずに時間をかけながら、主体性をもって学び合える職員集団への成長を促していくことの大切さ」を示唆していたように思う。米田教諭が述べているように、同校では、当初より力のあるベテラン教員が米田教諭の授業づくりに積極的に関わり、授業者としての経験を積ませながら、「授業のできるミドルリーダー」として育て、同教諭を中核に据えた学校改革に継続的に取り組んできたと言える。

23年ぶりに研究発表会を再開するにあたり、米田教諭自身が授業者として立つのではなく、学校として、チームとして研究を進めていくことを考えてプロデュースすることに徹しており、同教諭がミドルリーダーの自覚をもって、チーム作りに取り組んでいることがうかがえる。

いま、同校の教員集団は、年齢の上下にかかわらず、互いの授業実践から学び合うことを続けており、若手の授業実践力の向上だけでなく、ベテラン層、中堅層の教員の授業にも変化が見られるようになってきている。10年という歳月をかけ、３代の学校長が思いをリレーしながら創り上げてきた同校の研究推進スタイルは、授業改善の進捗にもどかしさを感じている学校にとって、研究推進におけるひとつのモデルを示してくれているように思う。同校の授業研究が今後どのように引き継がれ、さらなる発展を遂げていくのかを楽しみに見守りたい。（須佐）

参考資料・引用資料

・四箇郷小学校　研究紀要（1995）
・四箇郷小学校　研究紀要（2021）
・四箇郷小学校　研究紀要（2022）
・四箇郷小学校　学校沿革史